
悲哀の歌

半兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲哀の歌

【著者名】

半兵衛

N4893M

【あらすじ】

憎しみの中に生まれた、ひとつ愛の物語

-第一部 紅の街 -

カラーン カラン

じじんまりした店内に、ドアベルの乾いた音が響いた。

「いらっしゃい」

ここアルフォガードで一番品揃え豊富な量販店。

一見埃っぽくてしなびた小さな商店だが、旅支度ならここが一番だとの評判だ。

店主の座るカウンターの奥には、狭い空間にギュウギュウに押し込められた無数の商品棚が並んでいる。

明りはなく、小さな窓から入る光のみがレンガの床を照らす店内。運よく、今は客はまばらだった。

「」主人、2、3週間分の食料とフード付きのマントを探しているんだが

頭のてつぺんがはげあがつて、顔にはシワが目立つが、感じの良さそうな店主の主人がにっこり笑つた。

この親しみやすい笑顔が評判のひとつなのかもしれない。

「ああ、もちろんだとも、ここなら何だつて揃うわ」

そういうて主人は少しまつた背中を伸ばし、所狭しと並べられた棚の間へ入つていった。

ゴソゴソと品物をあさる音が聞こえたのは、とうに主人の背中も見えなくなつた頃だった。

一体この店はどうほどの広さがあるのであらうか。

一見、立派なレンガ造りの建物に挟まれた小さな商店だが、品揃えも噂通り素晴らしく、使い方も分からぬ品物がずらりと並んでいる。

「ところでお若いの、旅の方かのう

見たところ、この土地の方じやないがどつから来なさつた」

これだけ商品が有れば当たり前のことだが、まだ探し物が見つからないのか、主人は奥でゴソゴソやりながら言った。

人間の国アルフォガード、数百年前にここシャナージュ大陸に移住し建国して今に至ると伝えられている。

起源こそ周辺各国より劣るが、今では大陸一の規模を誇る大国となっていた。

中でもこのアルフォガード城下は一番の商業都市だ。

癖のある茶髪が大半を占める人間。

目立つ銀髪にマント姿という俺の出で立ちは、どこからどつ見ても人間のそれではない。

「ああ、野暮用でゴンデダールから出てきたばかりだ」

フェアリーの国ゴンデダールは、由緒正しき長い歴史を持つアルフォガードの隣国である。

遠い昔の名残ともいえる、著名な貴族も多く住んでいる。

「ゴンデダールだつて、それにしちゃお若いの、随分と体格がいいんだな」

やつと田舎でのものを見つけたらしい主人は、また狭い通路をゆるりと戻りながら言った。

まあ主人の疑問ももつともで、

どう見たって俺は、小柄でどこか気品のあるフェアリー種族には見えないだろう。

もとも、種族がどうのと語れた立場ではないのだが。

「俺はフェアリーではない、それも当たり前だらうな」

興味深げに俺を見つめる主人は奥から抱えてきた食料と、こげ茶色の簡素だが汚らしくはないマントを包みながら、また楽しそうに話し始める。

暖かくなってきたといつてもまだ春先で、時折吹く風は肌に冷たく感じられる。

防寒着としてもマントは旅に欠かせない。

「まだ出てきたばかりなら、もう少しここに居るのかい」

壁にもたれ掛り、主人が姿を現すのを待っていた俺は、商品を包む主人の座るカウンターへ。

そこで投げかけられた疑問に、これからのお予定を思い出してみる。

「何日かは留まるつもりだが。どうしてだ、何か祭りでもあるのか

そういえば、なんだか町を行き交う市民達は、高揚して、皆何かを楽しみに待ちわびているかのような雰囲気を感じていた。

城下町全体が浮き足立っている、といったところだろうか。もちろん、今日の前に居る主人も決して例外ではなかつた。

「え、知らないのかい。明日はあるアイリス様の戴冠式じゃないか」

まるでプレゼントを待ちわびる子供のように皿をキラキラと輝かせ

た主人は、俺のそつけなさに驚きながらも、なお嬉々とした表情を崩さず市民達が待ちわびる催しの内容を話した。

アイリス・＼・サンマリア

アルフォガードの期待の次期女帝。

彼女の父である前帝と、皇帝候補だった妹を同時に失くした国にとっての最後の希望とも言つた所か。

就任前より市民からの絶大な支持を得ているという彼女。

噂には聞いていたが、まさか彼女の戴冠式が明日に迫っているとは。市民達がそわそわして落ち着かないのもうなづける。

「 そうか、明日が戴冠式か。それで、お顔を拝見できる機会はあるのか」

市民達から慕われ、必ずや賢帝になるだろ？と噂される期待の女帝。純粋にどれほどの人物か見てみたくなった。

「 ああもちろんとも。

機会どころか戴冠式は町の大広場で行われるんだよ、なにしろアイリス様はわしら市民のことを一番に考えてくださってるからな」

そう主人は、たいとう誇らしげに言つた。

相当熱狂的なアイリスの支持者の一人なのだろうか、自分もアイリス様のお顔が少しでも近くで拝見できるようになつて飛んで行く、などと話が止まらない。

だがそれらの言葉は全く俺の頭に入つては行かなかつた。公開で、しかも城外での戴冠式など聞いたことが無い。支配者たるもの、命の危険は常にについて回る。

それを大勢の一般人の中では式典を開くなど、それこそいつ暗殺されてもおかしくは無い。

余程の馬鹿か、それとも眞の賢帝なのか。

アイリスへの興味は更に深まった。

「…………いの、お若いの。ほら、出来ましたよ」

気づけば、思案にふけってしまっていたようで主人の声で現実に引き戻された。

「つああ、すまない。助かつた」

につこりと笑みを向ける主人の手から包みを受け取ったその時。

キヤア————

この奥まつた裏路地の店内にも聞こえる程大きな、そして聞きなれた悲鳴が響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4893m/>

悲哀の歌

2010年10月10日20時09分発行